

Title	「世直し」ノオト (2019 年度・夏)
Author(s)	池田, 光穂; 井上, こう; 海野, 隆 他
Citation	Co*Design. 2020, 7, p. 17-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75575
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「世直し」ノオト (2019年度・夏)

池田光穂 (大阪大学COデザインセンター)

井上こう (国立民族学博物館外来研究員)

海野隆 (医薬品非臨床安全性コンサルタント 獣医師)

岡野彩子 (大阪大学COデザインセンター)

上條美代子 (看護師)

北村敏泰 (ジャーナリスト)

熊野以素 (日本社会保障法学会)

滝奈々子 (京都市立芸術大学芸術資源センター非常勤研究員)

林田雅至 (大阪大学COデザインセンター)

山森裕毅 (大阪大学COデザインセンター)

※所属・肩書は投稿日 (2019年7月31日) 現在

“Yonaoshi” Note (Summer semester 2019)

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

Ko Inoue (Visiting Researcher, National Museum of Ethnology)

Takashi Unno (D.V.M. Consultant, non-clinical safety for pharmaceuticals)

Ayako Okano (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

Miyoko Kamijo (Nurse)

Toshihiro Kitamura (Journalist)

Iso Kumano (Japan Association of Social Security Law)

Nanako Taki (Visiting researcher, Archival Research Center, Kyoto City University of Art)

Masashi Hayashida (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

Yuuki Yamamori (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)

キーワード _____ 世直し、対話、行為

Keyword _____ Yonaoshi, dialogue, action

このノオトは、2018年4月25日に誕生した「世直し研究会」に集う大学内外の参加者が、研究会での対話をもとに考えて綴った「ノオト(notes)」の第3弾です。「世直し研究会」は、2006年4月から2016年3月まで大阪大学コミュニケーションデザインセンターにおいて開催された「現場力研究会」の後継組織として発足し、通算で185回を数えます。月1回水曜日に大阪大学COデザインセンターで開催され、世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく、「世」のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、「世直し」へと繋げていくことがこの研究会では目指されています。

今回は、第10回から第15回までの研究会(2019年2月~同年7月)における対話から編み出された10編のエッセイをご紹介します。この期間に取り上げたテーマは以下の通りです。

- 第10回(2019年2月20日) 堤未果著『日本が売られる』(幻冬舎、2018)を読む
 - 第11回(2019年3月27日) カンボジア山地民クルンの音と共同体 ~鳴って揺れて聴こえて知る
共同体 同調する・しないのはざま~
 - 第12回(2019年4月24日) 2019年度研究プロジェクト会議 みんなで計画を立てましょ
 - 第13回(2019年5月29日) <テーマ-いのち>~動物福祉愛護と動物実験~
 - 第14回(2019年6月26日) 外国人労働者の受け入れとその諸問題
 - 第15回(2019年7月24日) 「世直し」ノオト(2019年度・夏) 合評会
- ※ 第1回から第9回までの研究会テーマは、Co* Design 第6号(2019年7月)に掲載の「世直し」ノオト(2018年度・冬)をご覧ください。

2019年度の最初となる第12回研究会で「研究プロジェクト会議」と称して今後取り上げたいテーマを話し合ったところ、<いのち>というテーマに最も多くの関心が集まり、継続的に取り組んでいくことになりました。そこで今回のノオトは、従来の世直しに関わる自由テーマに加え、<いのち>という指定テーマでもエッセイを募りました。そのため何らかのかたちでこのテーマに関わるものが多くみられます。

「世直し研究会」と「現場力研究会」については下記URLをご参照ください。

世直し研究会：<https://goo.gl/hvkRBz>

現場力研究会：<https://goo.gl/cPYDEv>



1 | 乳児のいのちと「水の洗礼」

この話は1980年代中ごろに中米の先住民と征服スペイン人の混血の末裔であるメスティーソの農民の話でフィールド調査をしていた頃の話である。私は2001年にその経験を1冊の本(『実践の医療人類学』2001年)にまとめたが、この話はそれに収載されていないものである。

ある日、村で子供が生まれた。カトリックの教えに従って、生まれた子供は洗礼を受けなければならない。しかし村には神父は住んでいない。神父はミサを執り行うために2、3カ月に一度くらいしかやっこない。洗礼は教義上カトリック信仰の始まりであるが、村の人たちに言わせれば「人間の仲間入り」そのものをも意味する。そのため神父抜きで、いわば非公式に教会における洗礼を待たずして自分達で赤ん坊に「洗礼」を挙行する。「水の洗礼」(パウティスモ・デ・アグア)と呼ばれるこの慣習とは、神父によって祝福された聖水を手し、それを生後8日目の子供の頭に注ぐことで「取りあえずの洗礼」を施すことだ。

教会での洗礼と同様に「水の洗礼」においても実の親は、ゴッドペアレントつまり代父と代母になってくれる成人を探し、それに立ち会ってもらう。どうして神父により正式の洗礼を待たずにこのような世俗的な慣習をおこなうのだろうか？ 二つの理由があった。

ひとつは、乳児の死亡率の高さだ。農村で生まれた赤ん坊が教会での洗礼を待たずに死んでしまうことがある。人は死んだ時には天国にも地獄にもいかない。辺獄(リンボ)というところで最後の審判まで待つのである。生前に洗礼を受けていることと、最後の審判によみがえるために魂の器となる「身体」がちゃんと埋葬されていることが不可欠なのだ。日本では火葬をおこなうという話を僕が村びとにしたら、彼らは眼の色変えて次のように僕に訴えた。「おお神様！ 肉体がなければ、キリストと共に天国に昇天できないではないか？ もし君が死んでも、頼むから君の死体は燃やさないでくれ」と。

もうひとつの理由は、民間信仰による。チョルカという邪悪な鳥が真夜中に洗礼を受けていない赤ん坊を襲い、吸血することによってこれを殺すというものである。チョルカは「水の洗礼」を受けた子供にはもう襲うようなことはない。また、チョルカは魔女(ブルハ)の変身したものでもある。

生まれた時は元気でも、いつ起こり得るかも知れない赤ん坊の死亡。それに先立ち、いち早く赤ん坊に洗礼をさせて「人間の仲間入り」をさせてあげたい、という人びとの願望。また、生まれた赤ちゃんにもまた最後の審判に至るまでの時間的資格を与えるための努力。彼らの「いのち」の時間尺度は生まれた時から、死後の人生の事まで織り込み済みであるのだ。これはあくまでも僕の仮説的解釈である。メスティーソ農民たちの「いのちの誕生」についての考えを知るよすがとしては、これほどの好例もないと思うのである。

(池田光穂)

2 | カヨックを踊る、「いのち」の意味を想像する

カンボジア北東部、クルン人の村で60歳ぐらいのある男性が急死した通夜でのこと。彼の長女と次女が腰から上を大きく前後に揺らし、父の顔にかわるがわる覆いかぶさるばかりに、「私のお父さん!」と泣いて呼びかける。高い音で始まり、ぐっと音が下がって「家を新築するための材木を用意したところだったのに…」 「もうあなたはいない…」と続く。歌のような音の上げ下げとともに喪失を嘆くのはきまった様式のもので、それは自覚されないぐらいに当たり前の、身だしなみならぬ声だしなみのようなものだ。

夜中になっても泣きは続く。一方で、死者の家の目の前の広場では冷蔵庫ほどあるスピーカーから歌謡曲やダンスミュージックが遠慮なく大音量で流され、多くの参会者が踊りに打ち興じる。これも当たり前の光景だ。家の中から鋭く裂くような悲嘆の音が、スピーカーが流すとほけた調子の歌に重なるが、踊っている人たちは楽しさをふりまき踊っている。泣く人や泣く人に寄り添っている人たちがそれを咎めるようなそぶりはない。

楽しそうに踊る人も、その人なりに「いのち」を悼む気持ちを潜ませているのではないかとはじめは思った。でもそんなのは自分のものさしだろう。聞けば、葬式に参会する自分たちが楽しむために踊るのだそう、真夜中に遺体のそばでみんなが静かにしていたら死霊が怖くてたまらないと言う。そうか楽しさで恐怖にふたをするのか、いや、楽しさの意味はもっと深いだろうか、と依然私は臍に落ちない。日ごろどんな言葉やどんな身体的反応に取り囲まれているかによって、物事の納得の土台は違うだろう。ひるがえって、「いのち」が「かけがえなさ」「重さ」の意味にすぐ結びつくのも一方の側の納得の土台だ。これらの言葉があって、かしまるといふ身体的抑制が見習われるような環境からくるものだ。自分側の言葉や身体的反応が教えてくれないことに惹かれてみよう。

クルン語ではカヨックという一つの言葉を死者、遺体、死霊、葬式の意味で使い分ける。とはいえ一つの言葉なので、たとえば「死に柄^{がら}」（にわか造語。柄は事柄、身柄などのそれ）のような包括する一つの意味があるかもしれない。葬式の踊りにはラム・カヨックという当たり前に定着した言葉があり、直訳で「カヨックを踊る」だ。「～を踊る」は「安来節を」など踊りの種類の言葉とふつつ合わかさるが、もつつかみにくい何かを踊るといふことがあるだろうし、案外直訳で何か言い得ているかもしれない。死に柄は踊るものかもしれないな、などと思えてくる。が、まだわからない。身体でも試してはいる。彼の地の葬式で私も時々踊るようになった。はたして、踊ると気持ちいいという以上の納得には達していない。2年ほどの民族誌調査で想像してみる「いのち」の意味は、なおも神妙な大テーマにしてしまうからか、とにかくわからない。

(井上こう)

3 被害者家族サイドに立った死刑制度の見直しを

知人が死刑反対運動に参画していたので、筆者も時々集会に参加した。

いわゆる「人権派」の活動家は「死刑は受刑者の人権を否定する残酷な制度だ。国連が1991年に死刑廃止条約を発効させ、EUをはじめ主要先進国が死刑制度を撤廃しているのに、わが国が批准しないのは恥ずかしい。即時廃止すべきだ」というような主張を繰り返していた。

しかし、愛する人を殺害された家族・親族の犯人に対する憤怒・怨念はいかばかりだろうか？ さらに被害者が味わった苦痛や無念さを犯人にも経験させてほしい、極刑を希望するといった言葉が出てくるのは当然である。

2014年度に実施した内閣府の調査では、「死刑は廃止すべきである」と答えた者の割合が9.7%、「死刑もやむを得ない」と答えた者の割合が80.3%と死刑存置派が圧倒的に多い。

当初、弁護士の岡村勲氏は死刑反対の立場を示していたが、夫人が殺害されたことを契機に全国犯罪被害者の会を組織し死刑賛成に転じた。そして裁判で被害者家族の心情を陳述し、被害者の遺影を持ち込むことがゆるされるようになり、犯罪被害者家族の心に寄り添う方向で裁判の改善に尽力された。

こうしてみると、死刑廃止派の主張は「犯罪者の人権」を追求するという方向のみに終始し、犯罪被害者家族の心の叫びを顧みていない。これに死刑廃止運動の行き詰まりの一因と考える。犯罪被害者家族の感情を踏まえたとえ死刑反対のあり方を考えなければ、我が国の死刑廃止は永久に実現しないであろう。

筆者は医学・生物系のバックグラウンドを持つものだが、電気椅子にせよ、ギロチンにせよ、絞首刑にせよ、それらは「安楽死」といえる。速やかに中枢神経系の機能は失われ、1分以内に確実に意識は消失する。死刑執行前の恐怖はあるだろうが、執行されてからの苦痛は一瞬で終わるものと推定される。したがって、犠牲者の未来が奪われる無念さ、恐怖、苦痛の重みに比べると、一瞬で終了する死刑執行の恐怖・苦痛はバランスされるのだろうかと思う。

最近では、死刑になりたくて大量殺人を起こす人がいるが、これは死刑が犯罪抑止力としての意味をなさないことを示している。

犯罪被害者家族は、犯人が死刑となることで、憤怒と怨念の標的を失い、虚脱状態に陥るといったこともあるという。永山則夫死刑囚のように判決を受けて反省と贖罪の日々を送り人格的にも錬磨されていった人物もいるが、反省の色もないまま刑を受ける人もいるという。この観点からすると、犯人を生かし続け、反省と贖罪の念を持つまで服役させる方が、死刑反対と被害者家族の心情の双方に応える道ではないかと考える。

(海野隆)

4 「労働力を呼んだが、来たのは人間だった」

今年2019年6月の第14回世直し研究会に弁護士の古川智祥さんをお招きし、「外国人労働者の受け入れとその諸問題」というテーマでお話し頂いた。途上国に日本の技能や知識を伝える〈国際貢献〉を掲げ、外国人の〈技能実習〉という制度が始まったのが1993年。だが事実上は安価な労働力確保のための制度と化していると批判が絶えない。今や日本で働く外国人は146万人。深刻な人手不足が続く中、国は4月に改正入管法を施行し、さらなる外国人労働者の受け入れ拡大に踏み切った。〈特定技能〉という新制度は、単純労働に従事する外国人を正面から受け入れることを認めた点に大きな意義がある。しかし技能実習の問題を引き継ぐだけになりはしないかと、古川さんは危惧している。

法務省によれば、2018年12月末時点で技能実習生は32万8360人である。ベトナム人が最も多く全体の半数を占める。また今年3月29日の報告では、2012年から17年の6年間に技能実習生171人が亡くなった。死因は、病死59人、実習外の事故死53人、実習中の事故死28人、自殺17人、殺人又は傷害致死9人、その他5人。受入先企業などからの失踪者は昨年1年間で9052人に上り、過去最多という。ちなみに技能実習生には職場や職種が変わる自由がない。NHKスペシャル『夢をつかみにきたけれど ルポ・外国人労働者150万人時代』（2019年7月13日放送）は、ベトナム人技能実習生の死や逃走に纏わる過酷な現実を報じた。実体の把握と対応は、いのちにも関わる喫緊の問題だ。

かくいう私も外国人としてドイツで7年暮らした。渡航した1992年は、極右による暴力事件が2285件にも達した異常な年だった。8月にはネオナチの若者たちが、旧東独の都市ロストックの亡命申請者登録センター——当時ベトナム人労働者ら百人余りが住んでいた——に放火した。火炎瓶が投げ込まれると、付近の住民が拍手喝采し、私は外国人であることに恐怖を感じた。この事件を題材とした2014年制作の独映画『俺たちは若い。俺たちは強い』（*Wir sind jung. Wir sind stark.*）でも示されたように、彼らの外国人に対する憎悪は、〈ドイツの寄生虫〉や〈ドイツの規範を守らない者ども〉を退治するという排外主義に発するのみならず、現状に対する不満や未来への不安が混在する複雑なものだった。かつて歓迎された外国人労働者が、不況になれば格好のスケープゴートとなった。

「労働力を呼んだが、来たのは人間だった」。外国人労働者問題に直面したスイスで作家のマックス・フリッシュがすでに1965年に述べた言葉だ。来るのは労働搾取の対象ではない。それぞれが自分の物語を持つ生身の人間なのだ。異国の言葉やルールの理解は容易ではなく、苛立たれ、疎んじられ、偏見の目で見られ、傷つき、孤独に沈み、病み、死すら考えることがある。我々が外国人労働者を〈受け入れる〉とは、彼らと〈共に生きる〉ことを意味する。カルチャーショックを受けることもあるが、時間をかけ、彼らが困った時には隣人として手を貸し、地域コミュニティの輪に招き入れるといった地道な活動が大切だろう。ドイツで親切に接してくれた人々のことを私は決して忘れず、自分もそうありたいと願っている。こうしたささやかな連鎖が世直しに繋がってゆくと信じている。

(岡野彩子)

5 | 居場所を得る

2018年春、私はオープンして間もないデイサービス(福祉施設)が看護師不足で運営に支障を来していると聞き、ワンポイント応援することにした。その後、確保はできたものの安定するまでと要請され、週に1回のペースで通勤に往復3時間かけ、非常勤看護師として働いている。40年ぶりに部下がいない看護師の立場に戸惑いもあったので「見ざる聞かざる言わざるの三猿主義」、確信犯のフリーライダーである。

オリエンテーションらしきものもなく、組織化されていない集団は野放しの感があった。それぞれがそれぞれに一生懸命に業務をこなしているように映った。同僚である介護職たちはとりあえず取り急ぎ、「看護師さーん。ちょっと」と呼ぶ。「ナースは時給が高いんやから使わな損」らしい。レベルは、教育はどうなっているのだろう、と査定や監査員のみで見えてしまう。長居は無用と現場をやり過ぎそうと考えていた。ただ、次々出てくる気になることや違和感を放置できない性分である。

ある時、脳出血後遺症の左半身麻痺に伴う痛みと痺れに苦しみ、3年以上も大量の鎮痛剤や安定剤を常用している元商社マンAさん(64歳、要介護2、週3回通所)と話した。眉間にいつも縦ジワが見られ、「一日の総てが痛みに支配されている」と仰る。嫁いだ娘は関東へ転居し独居である。彼のニーズは「薬が効かなくなるのが心配。現状を何とかしてほしい」。だが、膠着状態である。放ってもおけず施設長達に相談したが、担当のケアマネージャーに任せておけばよいとの事だった。

そこで、熊谷晋一郎らの当事者研究の有効性報告(臨床心理学 増刊第11号『みんなの当事者研究』金剛出版、2017)をヒントに来所時のレクレーションとして「当事者研究」をAさんに提案し、「PDCAやなあ」と、了解された。痛みや関連事項を検討、モニタリングし傾向を分析、対策を共に見出すこととし、参考資料に手を加えオリジナル表(A4横長サイズ)を作成した。目標は苦勞をしてくれているAさんの身体との良好なコミュニケーションだから、身体の云い分、体調や気分の凸凹を記録する。表題は「痛み日誌」ではなく「体話ノート」とした。一枚に一週間をまとめて表示、変化を追えるよう可視化を図った。エクセルの表を何度か修正してくれたのは事務のスタッフだった。症状があっても頓服を服用せずに済んだ時、意外と気にならなかった時、日常に支障のない時間帯もあった。幾つかの「例外」に緩和のヒントも見いだせた。まだまだだが、ほんの少し手応えを感じる。この表は「後始末から前始末へ、ケアを処理から予防へ未来志向にする」と、スタッフが関心を示すようになったのも嬉しい変化である。

いつからか私は名前前で呼ばれている。人は人をケアすることで自分の居場所を得、その過程で心理的安全性を担保されてもいるようだ。そして私はまだデイサービスの看護師を続けている。

(上條美代子)

6 | ゲゲゲの過ち——あるいはアトムなる憂鬱

ハンセン病問題取材について、国家賠償訴訟原告団長、社会活動家で詩人の^{こだま}笹雄二さんが故水木しげる氏の漫画「ゲゲゲの鬼太郎」の大ファンだったと知った。しかし、死してから「目玉おやじ」となって鬼太郎を助けるその父親が、1969年刊行版の『水木しげる集』（筑摩書房）では「らい病」と表現されている。しかも以降かなりの期間の版の中で「不治の病」とされ、全身が溶ける恐ろしいものとして描かれた。原因菌が発見されて特效薬も輸入され、完治する病気となりつつある時期から言えば明らかかな誤りだ。差別的な「癩病」呼称が変更されても、当時なお世間に広がる誤解と偏見から作者も自由ではなかったということになる。

だが笹さんは偏見は批判しつつも、水木氏の抑圧された者たちへの眼差し、鬼太郎たちの自由奔放な生き方に、「『妖怪』の世界を通しての、人間に対する共感と限りない愛を心底確認できる」と賛辞を送った（栗生楽泉園入所者自治会文芸誌『高原』2007.11月号）。間違いは犯した、だが後に人権や平和を訴えた漫画家を頭から否定することをしないのは、82歳で亡くなるまで元患者の人権擁護に闘い続けた笹さんの心の広さ、そして真の人間性回復運動の懐の深さだろう。

「科学の子」とされた「鉄腕アトム」は小型原子炉を動力とした。その使用済み放射性廃棄物は処理方法が不明だし、現在なら「そんな危険なものが空を飛ぶなんて」と問題になるかも知れない。きょうだいが「ウラン」や「コバルト」であることから、作者手塚治虫氏が制作当時の「夢の原子力」神話に影響されていたのではないかと考えられる。しかし、だからといってそれを「原発推進者」「原発運動の敵」と決めつけ退けるなら少し偏狭ではないか。

手塚氏はその後、原発PRにアトムを利用したいという電力業界の申し入れを一切断っていたし、死の前年の88年のインタビューに「僕は原発に反対です」と明言している（『毎日新聞』2011.8.12夕刊）。著書『ガラスの地球を救え』（光文社、1989）ではアトムが原発と結びつけられるなど「世界は技術革新によって繁栄し幸福を生むというビジョンを掲げているように思われる」のを「たいへん迷惑」とし、「科学技術が暴走すればどんなことになるのか、幸せのための技術が人類滅亡の引き金ともなりかねない、いや現になりつつあることをテーマにしている…十万馬力の正義の味方も、科学至上主義で描いた作品では決してない…」と書いている。

このことは世直し活動のための「運動論」にもつながる。手近な人を理解が不十分という理由で叩くのは容易いが、闘うべきはもっと大きな敵だ。単純な排除は運動を狭くするだけでなく、人を「敵側」に追いやり、それによって「敵」を増やし有利にする危険さもある。誤りは誰にもある。だがそれに気づき、より良い方向に振る舞いを正すことに意識を向け、協力し合うことの方が大事だ。過去の間違いを反省しないまま、「元号」変更のどさくさに「新しい時代」を言いたて、過ちを拡大再生産しようとするような者たちは、指弾の対象であり論外だが。

（北村敏泰）

7 | 自宅で最期を迎えたい

大阪のベッドタウン豊中市の高齢市民アンケート(2018)の中に「死期が迫っている場合、あなたはどこで療養生活を送りますか」という質問がある。在宅死を勧める厚労省の意向に沿って登場した設問である。これに対して一般高齢者の25.9%が病院を希望し23.6%が自宅を希望している。実状はどうか。1951年の日本では82.5%が自宅で死去したが、現在は75.8%が医療機関、9.2%が施設、自宅での死は13%にすぎないという。半世紀の変化は私も体験した。1969年、祖母が自宅で死去、88歳。家族・親族14人で看取った。2007年、65歳の私が入院し、認知症の母は特別養護老人ホームに入居し、96歳で死去した。2019年、一人暮らしで脳梗塞により半身麻痺となった70歳の義弟は老人保健施設に入所。在宅復帰への中間施設のはずの老健は特養待機者で溢れている。

超高齢化と認知症の増加、核家族化と家族介護者の高齢化、独居高齢者の劇的増加に伴い、『自宅で最期を迎える』のは夢物語となった。それでも厚労省は『最後まで在宅』の夢を宣伝する。なぜか？施設整備の抑制のためである。では、在宅介護給付を充実するのか？ノーである。要介護5の居宅サービス支給限度額は36万650円。身体介護型訪問介護(1時間未満)4270円、一日2.8時間しか利用できない。単価の安い生活援助訪問介護を併用しても限度4時間。しかも厚労省は利用者の多い生活援助を給付から外そうとしている。給付削減の代わりに厚労省は医療と介護の連携「地域包括ケアシステム」を謳う。しかし地域医療を担う筈の在宅療養支援診療所はどこかの町でも数えるほどしかなく、24時間訪問看護事業所に至っては、探すのが難しいほどである。更に介護と医療の分断の問題がある。介護職の通院介助は病院の玄関まで、付き添いは家族の仕事。介護職はインシュリン自己注射の介助ができない。介助ができる訪問看護の単価は身体介護の倍近く、利用すれば限度額を超えてしまう等々。これでは重度要介護者や独居高齢者は在宅死どころか『老健たらいまわ死』か『孤独死』の他はない。特養に入れれば「ラッキー」というのが日本の現状である。在宅が長く続けられる国はないのか？

オランダでは各家庭が地域で開業する家庭医を選んで年間契約を結び、医療を受ける。家庭医は地域医療の核であり、日常の看護介護を担う訪問看護師とホームヘルパーの資格は一本化されて最後まで在宅生活が可能になっている。家族介護者へのレスパイトケアも進んでいるという(廣瀬真理子「オランダにおける最近の地域福祉改革の動向と課題」『海外社会保障研究』162号、2008)。安楽死が認められている国であり死生観も違うと思われるが、家庭医制・医療と介護の統合・レスパイトケアの充実は見習うべきである。『在宅重視』を唱える厚労省の急務は介護給付の充実と介護・医療の統合である。

(熊野以素)

8 ハープが奏でる「いのち」と霊

グアテマラ北部高地コバン市周辺のマヤ系先住民であるケクチの人びとには、ムエル (*muhel*) と呼ばれる、事物に宿る霊と、ムシク (*musiq'*) と呼ばれる、人間か吐く息に宿る霊がある。ケクチの人びとの主食は、トウモロコシで作るパン (トルティーヤ) であるが、この2つの霊は、相補的な関係にあり、トウモロコシの大地を司る神であるツルタカ (*Tzuultaqa'*) と密接に関わりを持つ。

ムエルは、人びとの誕生とともにその人間に宿り、死後はツルタカの中に入りゆく霊である。ムシクは、楽器や口笛を演奏する人間の息を通して生まれる。ムシクの派生語のムシケフは、キリスト教の霊を含む一般的な霊をさす。トウモロコシの豊作を祈願するための祭礼マヤハクは、ハープとの合奏によってなされるが、演奏家である人間の息が、楽器の中に入り、音が発せられるとムシクが生まれると人びとは説明する。ハープによる合奏は通常ハープ、ヴァイオリン、ギター、トゥムトゥムと呼ばれるハープの共鳴箱を打ち鳴らす棒で構成される。演奏家は楽器へ息を吹き入れ、空間に音を発し、この音にはムシクが伴うといわれる。ヴァイオリンやギターについても同様であり、これらの楽器にはレブシャブアアル (音のすき間) と呼ばれる楽器構造上に亀裂があり、この音のすき間からムシクが生まれるのである。演奏家は、これら音のすき間は、人間の霊の出口であるムシカアルであり、楽器をとおして、人間のムシクが放出されるという。ムシカアルとはムシクとアアル (器具、装置) から成立し、ムシクの音が作り出される装置であり、各楽器の空気腔はムシクを放出する装置として解釈されている。このようにして、ムシクは楽器の空気腔をとおして奏者のちからとしてトウモロコシを発育させる神であるツルタカへ捧げられる。

ツルタカは音楽演奏により、ムシクを得て、ムエルとともにムシクを大地に吹き出し、トウモロコシ畑は肥沃なものとなると言われている。ムエルやムシクといった霊により強化されたトウモロコシを食することにより、ケクチの人びとのいのちは継承されているのである。事物と人間 (=マヤ先住民の神話によると人間はトウモロコシからできている) と大地の三者の「いのち」の調和こそが、豊かな大地の実りを産み出すのである。日々何気なくケクチの人びとが口にする食生活の背景には、わたしたちが感じ得ない霊的なものが存在し、さまざまな形の息=霊の循環を通して、生き生きとした彼らの生活を彩っている。私の専門は、民族音楽学という研究分野であり、日本人からは異国のエキゾチックな先住民音楽や楽器の研究であると思われる。しかしながら、ムエルとムシクの解釈を通して、その背後には、さまざまな「いのち」をめぐる息=霊の合奏がみられることが、お分かりになられたのではないか。そのように日本の皆さんに伝わったとしたら、身の回りの伝統音楽や楽器への見方もまた変わるかもしれない。

(滝奈々子)

9 | 長期滞在外国人の生命を巡る外国語双方向運用能力 (interactive competence) の不可欠性

大阪大学COデザインセンターはSDGs(国連が掲げた17の持続可能な開発目標)の実績を担う学内組織の一つである。私は、その目標の「3:すべての人に健康と福祉を、4:質の高い教育を、10:人や国の不平等をなくそう」の3項目の課題をベースに医療者とともに「結核対策」に取り組み、啓発研修及び人材育成ワークショップ活動を継続展開している。日本語学校に通う外国籍生徒に対して、まず健診などによって予防・早期発見に努める。結核患者が出た場合には次の支援者が学校と医療機関の間の媒介者となる。外国籍生徒の同一言語圏出身者・同僚の中からステークホルダー(文化的支援者)を選び、人材育成する。一方、日本人支援者も同様に育成し、「適正テスト」を以って「外国語双方向運用能力(interactive competence)」を身に付けさせ、校内で内服を徹底させるDOTS(直視監視下短期化学療法)を習得させ、合わせて「コミュニティー通訳」資格の付与を目標としている。日本人支援者の目下の予備軍は林田が箕面キャンパスで行なう「多文化サポート概論」など4科目を受講する熱心な40名ほどの様々な言語を専攻とする学部生である。

この「外国語双方向運用能力」について、従来外国語学習は学習言語・文化に適應(同化)・統合するものと歴史的に位置付けられる。現在欧州では、実施中の所謂「外国語検定試験」に対して、多文化・多言語主義を保証する「双方向運用能力」を問う新規試験の必要性が提唱されているものの、政治的な右傾化、自国中心主義の煽りを受けて、未実現のままである。そういう意味では2018年度大阪公衆衛生協会主催、本センター共催、関西SDGsプラットフォーム(JICA)後援による「適正テスト」(日本語・英語版)は先駆けで、今後多言語版化推進の契機として、今回の「結核対策」に導入を図る。媒介語=学習者母語・文化の重要性を強調し、「文脈を汲み取る感受性(contextual sensitivity)」に基づく「外国語双方向運用能力」の涵養に力点を置いている。いくら学習外国語だけをマスターしても、互いの気持ちは一向に伝わらないのである。これが「質の高い教育」の保証となる。同言語圏日本語学習者と日本人支援者の関係は、合わせ貝殻のように、互いの媒介言語、母語及び外国語を通じた補完的な関係になる。

結核対策は喫緊の社会課題であり、社会的な差別構造を築かないためにも、また社会に包摂するためにも、多文化支援人材は不可欠な存在となるのである。

参考文献

「適正テスト」(2019.2.16)開催告知：<https://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/seminar/2019/02/8032>
 平成30年度ストップ結核パートナーシップ関西 第6回ワークショップテーマ「長期滞在外国人の結核対策」報告書(2019.1.26)：http://www.osaka-pha.or.jp/suisin/pdf/suisin_31.pdf
<https://21c-kaitokudo.osaka-u.ac.jp/events/2019/8047> (林田雅至)

10 「これでいいのだ」

とあるアートNPOの方から「アートとフクシ」という大枠のなかで、「これでいいのだ」というお題でレクチャーの依頼をいただいた。もちろんこのフレーズは、赤塚不二夫の代表作『天才バカボン』に登場するバカボンのパパの決めゼリフである。ある出来事のキテレツでナンセンスな成り行きや結末に対して「締めの一言」として発せられるのである。

なぜこんなお題でレクチャーを依頼されたか。私は主に精神障害のために生きづらさを抱えている人たちとガヤガヤと対話する活動を行っているのだが、そこに依頼者が参加したときに、参加者のひとりが発したこのフレーズにグッときたからだろう。

このフレーズの何が心を打つのだろうか。分析をすると意外と多面的な言葉だということが見えてくる。まず「これでいいのだ」とは肯定的な評価・判断だといえる。次に、「これでいいのだ」は「これがいいのだ」ではない。言い換えれば、後者が唯一のものについての高い肯定を表しているとすれば、前者は無理のない中程度での肯定を表している。精神を病んでいるかどうかにかかわらず、成果を強く求められる社会に組み込まれているかぎり、私たちは評価に曝されざるをえない。しかもその多くは否定的な評価である。それによって病むということもあれば、病んだ後に病んでいるがゆえにさらに否定的な評価が続くことも稀ではない。このような厳しい環境をサバイブするうえで、自分(たち)を無理せず肯定できる言葉は非常に有用なものといえるだろう。

またこのフレーズは「(現時点では)これでいいのだ」というふうにも過程の肯定を表すこともできる。成果を求められるということは結果を求められるということであり、またそこでは失敗できないことが多いのだが、そのことがひとを追いつめることにもなる。それに対して「これでいいのだ」と発することで、結果を過程の一部としてとらえ直し、次へと繋ぐようなオープンな態度を取ることができるようになるという効能があるだろう。

さらにいえば「これでいいのだ」とは一種の〈ゆるし〉でもある。判断は英語でjudgementであるが、これには〈裁き〉という意味もある。実際、否定的な判断や評価は罪悪感や有責感を生じさせ、ひとを自罰や他罰に向かわせやすい。この一連の流れを〈裁き〉と呼ぶことができるだろう。つまり、成果を重視する社会は裁きを重視する社会でもありうる。それに対して「これでいいのだ」は無理のない中程度での肯定という許容(ゆるし)を表すことができる。このようなゆるしは自分や他人を裁きから逃れさせ、気を楽にさせ、生きづらさをほぐす効能があると考えられる。

かつて病いが神罰や罪と見なされた時代があったが、こうした発想は現代においても死んではない。このことは病いと罪悪感が隣接していることを表しているが、逆にいえば癒しとゆるしが隣接していると見なすこともできる。精神障害の人々の対話において「これでいいのだ」がグッとくるのは、このフレーズが持つ肯定とゆるしの効能が癒しへと繋がっているからではないだろうか。(山森裕毅)

(投稿日:2019年7月31日)

(受理日:2019年12月9日)